

令和2年度 第74回冬休み良書推薦運動

読書感想文コンクール

主催
協賛
後援

岩手県良書推進協議会
岩手県学校生活協同組合
岩手県小学校校長会
岩手県学校図書館協議会
岩手県PTA連合会

目次

- 一 主催者あいさつ
- 二 入賞者名簿
- 三 入賞者作品
- 四 審査を終えて
- 五 応募者名簿

審査員

大石善弘先生	近藤澄江先生	齋藤英明先生	畠山明美先生	藤村由美先生	田代五月先生	大淵奈実先生	永井臣之介先生	杉浦美香子先生
--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	---------	---------

会長あいさつ

岩手県良書推進協議会 会長 大石善弘

(現在 県立図書館の手作り絵本審査員)

日本子どもの本研究会会員 日本児童文学者協会会員)

第七十四回冬休み良書推薦運動読書感想文コンクールに入賞された皆さん、ご家族の皆様おめでとうございます。

日頃より、本会の活動にご理解とご協力を頂き厚く御礼申し上げます。

ご存知のとおり新型コロナウイルスの世界的蔓延により世の中が大変厳しい中、様々な制限の中でも子ども達は元気に学校生活を続けていることをうれしく思います。

今回のコンクールには前回を上回る参加校と応募作品が集まり、大変うれしく審査をさせていただきました。しかし、本当に残念ではありませんが、今回のコンクール表彰式も現在の新型コロナ感染症の拡大状況を鑑みまして、中止の判断を致しました。私はこの良書推薦運動読書感想文コンクールに第一回から三十五年以上にわたって携わってきましたが、まさか連続で表彰式が中止になる事など考えた事ありませんでしたが仕方ありません。

思えば、今の子ども達は十年前になる東日本大震災に始まって、台風や豪雨災害、そしてこのコロナ禍の災害と数多くの災害を経験しながら育ってきていると思います。私たち大人は子ども達に厳しい中で如何に生きるかを伝えなければならぬと思います。

子ども達には外出自粛、ステイホーム、新しい生活様式の中で、

多くのおうち時間の間に是非、読書の時間、読書をする習慣を身につける事をおすすめします。ゲームやテレビだけでは無く読書は本さえあれば一人でもできますし、自由な時間で始められて自由な時間にも終わる事もできます。三密にもなりません。たまには親子読書もいいかもしれません。どんな本を選ぶかは堅苦しく考える必要はなく、読み物はもちろん、漫画や図鑑、辞書でもいいでしょう。興味がある物をどんどん読んでみましょう。たくさん時間があるので、長編やシリーズ物にチャレンジしてみてもいいでしょう。本との出会いは、必ず人生を豊かにしてくれる栄養や宝物になるはずですよ。

まだまだ先行きが見えない不安もありますが、明けぬ夜はないと信じて乗り切つていきましょう。どうぞ次回の第七十五回夏休み良書推薦運動読書感想文コンクールにもたくさん読書感想文作品をお寄せ下さい。私をはじめ審査員の先生方も楽しみにしています。そして秋には表彰式で入賞者のみなさんの笑顔に会える事を楽しみにしています。

令和2年度 第74回

冬休み良書推薦運動読書感想文コンクール

入賞者名簿

〔は図書名〕

〈最優秀賞〉

あきらめないところを大せつに

『恐竜トリケラトプスとあくまのもり』

洋野町立中野小学校 一年 粒 來 朔 久

「フォックスさんのにわ」

「フォックスさんのにわ」

盛岡市立杜陵小学校 二年 佐々木 杏

ねがいをかなえるために

『かみさまのベビーシッター』

花巻市立矢沢小学校 三年 赤 坂 晃 和

音楽とともに未来へ

『ラグリマが聞こえる』

岩手町立沼宮内小学校 四年 高 橋 絢 音

働くことは生きること

『僕たちはまだ、仕事のことを何も知らない。』

宮古市立山口小学校 五年 箱 石 香 乃

自分だけの水色のバスは

『さよなら、ぼくらの千代商店』

宮古市立田老第一小学校 六年 館 崎 百 奏

〈岩手県小学校長会会長賞〉

小さな体で作る大きな森

『ぼくらはもりのダンゴムシ』

軽米町立晴山小学校 二年 古 館 陽 和

世界一ありがとう

『ふしぎ町のふしぎレストラン 世界一まずい料理』

盛岡市立北厨川小学校 三年 櫻 田 真 尋

中洞さんと山地酪農

『しあわせの牛乳』

宮古市立田老第一小学校 六年 田 村 昇 龍

〈岩手県学校図書館協議会会長賞〉

ダンゴムシさんへ

『ぼくらはもりのダンゴムシ』

平泉町立長島小学校 一年 千 葉 愛 美

プラスチックごみをへらそう

『ゴミの島のサバイバル』

盛岡市立上田小学校 四年 土井尻 旺 介

牛乳に感謝して

『しあわせの牛乳』

盛岡市立土淵小学校 五年 吉 田 航

〈岩手県PTA連合会長賞〉

ゆう気を出したタクくん 『ぼうけんはバスにのって』

盛岡市立桜城小学校 一年 鈴木 暖 穂

大切なのは思いやり

『動物たちのお医者さん／わさびちゃんとひまわりの季節』

盛岡市立土淵小学校 三年 菊池 舜人

仲間から学んだ愛 『それでも人のつもりかな』

一戸町立奥中山小学校 六年 金石 知奈

〈優秀賞〉

ないてもいいんだよ 『ねこなんていなきゃよかつた』

盛岡市立仙北小学校 一年 宮城 理愛

ゆう気は力になる 『ぼうけんはバスにのって』

一戸町立鳥海小学校 二年 土川 梁

しょう来へ歩む道

『キキとジジ魔法の宅急便 特別編その2』

北上市立黒沢尻北小学校 三年 角田 凜花子

動物達を助きたい！

『動物たちのお医者さん／わさびちゃんとひまわりの季節』

盛岡市立高松小学校 四年 菅原 日向

私が考える働くために必要なこと

『僕たちはまだ、仕事のことを何も知らない。』

盛岡市立青山小学校 五年 春日谷 由奈

地球よ、理想郷となれ 『ぼくたちの緑の星』

宮古市立田老第一小学校 六年 吉水 愛莉

〈入選〉

ダンゴムシ大すき

『ぼくらはもりのダンゴムシ』

滝沢市立滝沢第二小学校 一年 橘 蓮 音

たべる、大切

『スタジオジブリの食べものがいっぱい』

宮古市立山口小学校 一年 箱 石 好 南

心にとどいた光・・・

『フォックスさんのにわ』

盛岡市立高松小学校 二年 佐々木 真 幌

愛じょうをこめて

『動物たちのお医者さん／わさびちゃんとひまわりの季節』

大船渡市立盛小学校 三年 北 田 愛 奈

ふしぎレストランが教えてくれたこと

『ふしぎ町のふしぎレストラン 世界一まずい料理』

宮古市立田老第一小学校 四年 高 橋 聖 翔

希望への道

『それでも人のつもりかな』

平泉町立長島小学校 五年 千 葉 雅 瑛

しあわせな酪農

『しあわせの牛乳』

陸前高田市立米崎小学校 六年 熊 谷 壮 太

〈学級賞〉

宮古市立田老第一小学校

〈学級賞〉

宮古市立田老第一小学校

遠野市立鱒沢小学校

6年

3・4年

〈佳作〉

たからもの

『なまえのないねこ』

盛岡市立本宮小学校 一年 菊池 未央

「なまえのないねこ」

『なまえのないねこ』

盛岡市立向中野小学校 一年 堀川 七海

かわいいしにがみ

『まいごのしにがみ』

北上市立江釣子小学校 一年 高橋 瑠梨

ねこがいてくれてよかったよ

『ねこなんていなきゃよかった』

二戸市立石切所小学校 二年 藤村 星花

おふろなんかこわくない

『ぼくちのおふろ』

盛岡市立飯岡小学校 二年 向井 あさひ

平和へのいのり、平和へのねがい『ラグリマが聞こえる』

盛岡市立杜陵小学校 三年 久慈 廣多

心をかえたりよう理

『ふしぎ町のふしぎレストラン 世界一まずい料理』

盛岡市立土淵小学校 三年 吉田 那乃葉

本当の「かみさま」

『かみさまのベビーシッター』

滝沢市立滝沢小学校 四年 関 紅羽

「夢にむかって」

『しあわせの牛乳』

盛岡市立北厨川小学校 五年 岡本 諭行

海を守るために

『ゴミの島のサバイバル』

宮古市立田老第一小学校 六年 佐々木 玄太

あきらめないところを大せつに

洋野町立中野小学校 一年

粒らい 朔久

「トリケラトプスとあくまのもり」という本を見て、すぐによんでみたくなった。なぜなら、ぼくは、きょうりゅうが大すきだからだ。きょうりゅうの中でも、トリケラトプスが一ばんすきだ。つのが三本もあって、えりかざりもかっこいいんだ。

ビックホーンは、なっていたウネンラギアにはなしかけてやさしいとおもった。

「そいつは、にくしよくきょうりゅうだぞ。ゆだんするな。」

と、ぼくは、ビックホーンたちにおしえてあげたかった。でも、まさか、あくまのもりにくしよくきょうりゅうたちがまちかまえていたなんて、ぼくもだまされた。こわいにくしよくきょうりゅうがたくさんいて、ビックホーンたちは、あつというまにたべられてしまうんじゃないかと、ぼくのからだは、ぶるつとふるえた。

「はやくにげて。」

ぼくは、こころの中でさげんだ。だけど、ビックホーンは、にげなかった。三本のつのと力づよいまえ足で、こぶんた

ちをけちらしたのだった。そのとき、ぼくのあたまの中でなにかがはじけた。リトルホーンもじぶんよりつよいあいてにたいあたりしている。

「がんばれ、あきらめるな。」

さつきまでは、にげてほしかつたのに、おうえんしていた。ぼくのあたまの中ではじけたものは、なんだったんだらう。ビックホーンたちは、はじめからにげなかった。

ぼくは、さか上がりができない。はやくできるようになりたくて、れんしゅうしてみたけど、できなくて、あきらめてやめてしまった。ぼくのあたまの中ではじけたのは、にげるころだ。ビックホーンたちのように、あきらめず、ちようせんするころをもつて、またさか上がりのれんしゅうをがんばるぞ。

〔図書名「恐竜トリケラトプスとあくまのもり」〕

〈講評〉

大好きなものが載っている本は、手にしただけでわくわくしますね。朔久さんは大好きなトリケラトプスの物語を応援しながら、すみずみまで見逃さずに楽しんだ様子が、文章から伝わってきました。本を読んでいる時に自分の頭の中で何かがパチンと弾けた瞬間を逃さず、その正体を「逃げる心」ととらえ、不得意な逆上りに挑戦しようとする気持ちにつながたところが素晴らしかったです。

「フォックスさんのにわ」

盛岡市立杜陵小学校 二年

佐々木 杏

「ああ、よかった！ホッとした。」

この本を読み終わった時の、わたしのすなおな心の声だ。さい後の絵は、わたしの一番のお気に入り。フォックスさん、新しい「あいぼう」と車にのって帰ったね。これで、前のようにすてきな生活にもどれるんだね。

さいしょのさし絵は、楽しそうにガーデニングを楽しむ笑顔のフォックスさん。でも、読み進めるうちに、わたしの心はフォックスさんと同じようにパニックになってしまった。

とつぜんのなかよしの犬とおわかれ。犬はいつもいっしょの「あいぼう」で、フォックスさんの心のささえだつた。とつぜんいなくなつて、はじめてかんじるくらやみのどんぞこ。

わたしも前に、にたような気もちになつたことがある。わたしのひいおじいちゃんは、二年前にびょう気で天国に行つてしまつた。ひいおじいちゃんは、いつも笑つて色々教えてくれた。畑でいちごややさいを作り、田んぼでお米を作り、わたしもいっしょにしゅうかくした。大好きなひ

いおじいちゃんは、具合がわるくても畑に出た。休まなくていいのかなと思つたこともあつたけど、この本を読んで、ひいおじいちゃんもフォックスさんのように、畑や土、お日さまなど自然からパワーをもらつていたんだと思つた。庭からすうつと出て来たカボチャのつる。庭がゆつくりと時間をかけて、フォックスさんのぼつかり空いた心をうめてくれたんだなあ。わたしは、カボチャのつるが「あいぼう」からフォックスさんへの「元氣になつて。」というメッセージなのかと思つた。

大好きな「あいぼう」をなくし、かなしくてフォックスさんの心はおつたけど、新しい「あいぼう」を家ぞくにむかえて、心をとかしてもらつてね。そして、いつまでもなかよく楽しくくらしてね。

(図書名「フォックスさんのにわ」)

〈講評〉

絵本の最後の絵が「一番のお気に入りだ」と杏さん。最後の絵を見るまで、フォックスさんのことを心配しながら、読み進めていたのですね。2年前に天国に行つてしまつた大好きなひいおじいちゃんの姿とフォックスさんの姿を重ねて読んだことで、カボチャのつるのメッセージにも気がついたのかもかもしれません。

フォックスさんがこれからも相棒と仲良く暮らしていけるといいですね。

ねがいをかなえるために

花巻市立矢沢小学校 三年

赤坂晃和

ぼくは、こまったことがあったり助けてもらいたい時に、「神様、おねがい。」と、ついたよってしまふことがあつたけど、それは少しちがつていたみたいだ。

商店がいの福引きで、特賞の「かみさまのたまご」が大当たりした幸介。すぐくラッキーで、大切に育てれば、いい守り神になってくれるという。神様ならねがいごとくも何でもかなえてくれるかもしれないし、幸運が向ってくるはずと大よろこびしていた幸介とお母さんだったけど、たまごから生まれたのは、ぬいぐるみのようなかわいいう神様。ポンテンという名前で、生まれたての赤ちゃんだから一人じゃ何もできないし、あまえんぼうで手がかかって、お世話するのが大へんだった。

それでもいつかポンテンが、ねがいをかなえてくれると信じて、幸介とお母さんはポンテンがのぞむことはがんばって何でもした。けれど、ねがいは思いもしない形でかなうので、それがいいこととはかぎらなかつた。

期待していた神様とはちがうポンテンだったけど、「守り神様」のすごい力を発した場面がある。それは、お父さんが大切なしけんにおくれそうになつた時、間に合うようにと幸介がねがつた気持ちでポンテンにとどき、にっこりとわらつて、「幸せのおすそわけ。思いやりのおすそわけ」をすることで。神の力は、その場の空気をかえ、人の心をあたたくくし、じゅうたいしている道を開け、お父さんをしけん会場に間に合わせてくれた。

神様というのは、かんばつている人にさい後のひとおしをするのが役目。努力しない人に神様は力をかしてくれない。そして人の幸せをねがう人に力をかすことも分かつた。神様は何でもお見通しだつた。ポンテンは、はじめからお父さんが何か大切なことに取り組んでいて、一生けん命ががんばつていてことを知つていた。お父さんがポンテンにつめたい感じだつたのは、神様にたよらずに自分の力でしけんに合かくしたいと思う気持ちからだつたことも、全てポンテンは分かつていた。だからポンテンは、お父さんのことがすきだつたんだ。自分の力で努力したお父さんは、きつとしけんに合かくしたと思う。

神の力で家族を守つたポンテンは、心のこもつたおれいを言われ、おなかに「幸」という神印がついた。そのひとつ成長したあかしがとでもほこらしくて、ぼくもうれしかつた。これからも幸介と一しょに成長し、立ばな神様になつてほしいと思つた。

ぼくは、ゆめやねがいはただ神だのみしてもかなうものではなく、自分で努力してかなえられることだと気づいた。そして努力だけではなく、家族やまわりの人たちに支えられているからこそかなえることができるんだ。ぼくはこれから、思いやりと感しやの気持ちを忘れず、たくさん努力していきたい。いつか神様に、にっこりわらつてもらえるように。

〔図書名「かみさまのベビーシッター」〕

〈講評〉

幸介のお父さんの努力と幸介がお父さんを思いやる気持ちだが、神様の赤ちゃん「ポンテン」を「守り神」として成長させたのかもしれないね。晃和さんは、ポンテンと幸介の家族の話を読み進めながら、努力することの意味や、思いやりや感しやの大切さについて何度も考えていました。そして、自分の答えをしっかりと見つけていたことがすばらしかつたです。晃和さんの力強い文章も、大変読みごたえがありました。

音楽とともに未来へ

岩手町立沼宮内小学校 四年

高橋 絢音

拝啓 美音さんへ。新年を迎え、新たな気持ちでお過ごしのことと思います。ギターの練習を頑張っていますか。私はすごく感動したよ。だって美音から学ぶこと、応援したいこと、感動したことがたくさんあるよ。今から私の気持ちを聞いてね。

「美音」って名前は美しい音を奏でる人になるようにとおじいちゃんがつけてくれたんだよね。私の名前は「絢音」音楽がとても好きになるようにとお父さんがつけてくれた。ちょっと似ているね。何だかうれしい。

「人の心に伝わるようなていねいな演奏をたくさんの人に聞かせてあげなさい。そして、私が戻らなかつたら君がこのギターを弾き続けなさい。」壇上先生は戦争に行く前に美音のおじいちゃんとお父さんにそう言って、「ラグリマ」の曲を二人に託した。私も実際に、「ラグリマ」を聞いてみると、しっとりしていて、優しく穏やかな気もちになった。

「ラグリマ」はスペイン語で「涙」という意味だけど、分かる気がするよ。これは交通事故で亡くなったお父さんから教えてもらった思い出の曲なんだよね。だから、大河原さんが弾いていたとき、つい聞き入ってしまったんだよね。大好きだったギターをやめたのは、お父さんのことを思い出して苦しくて辛くなるから。でも、やっぱり本当はやめたくなかった。だって、お父さんがずっと美音に教えてくれたギターだもん。

音楽と一緒に思い出が頭に流れてくることが私にもあるよ。うれ

しかったことや悲しかったこと、そしてだんだん消えていくんだ。すると気持ちも落ち着いてくる。大河原さんもきっとそうだったんだよ。壇上先生のギターで弾くと忘れていた記憶がよみがえってくる。だから、原爆を経験したポロポロのギターでも直してもらったんだよね。このギターで壇上先生の想いを奏でられるのは大河原さんだけだから。このギターは大河原さんに助けられて、今また音を響かせているんだ。壇上先生もおじいちゃんもお父さんも空の上で喜んでいてと思う。みんなが好きだった「ラグリマ」を弾いて。

今度は美音だよ。美音がギターを弾く番。奏くんも大河原さんもお母さんも、美音にギターを弾いてほしいと思ってるよ。私も美音の「ラグリマ」を聞きたいな。音楽には人の想いがたくさんつまっていることを教えてもらったから。美音のおかげで、私ももっと音楽を好きになった。これからもたくさん曲を聞こうよ。

壇上先生からおじいちゃんとお父さん。おじいちゃんからお父さん。お父さんから美音へ。そして大河原さんから美音へと。こうやって引き継がれていくんだね。美しい音を奏でる人になるようにという思いも引き継がれていくね。美音がこの町に美しい音楽を響かせてね。音楽とともに未来へと。 敬具

(図書名「ラグリマ」が聞こえる)

〈講評〉

絢音さんが、美音にあてて書いた手紙。美音のギターに対する思いや大河原さんが原爆で焼けたギターを弾く理由を、絢音さんがしっかりと受け止めながら読み進めたことが伝わってきました。「ラグリマ」という曲がないだ大事な人たちの思い、そして音楽のすばらしさ。音楽が大好きな絢音さんだからこそ、美音のことをこれほどにも応援したくなったのですね。美音がギターとともに未来に踏み出すように、絢音さんも好きなことに一生けん命取り組んでくださいな。

働くことは生きること

宮古市立山口小学校 五年

箱石香乃

仕事をするということは、生きるという事です——以前、私が好きだったドラマの中で主人公が言った言葉だ。私が初めてこの言葉を聞いたときは、当たり前なことだなど思っていた。なぜなら、私達が生活するにはお金は必要で、そのためには、働かないといけない、生きるために働かなくてはならない。そんなふうにとらえていた。

しかし、尾上君や菅野さん、小林君の就職活動、そして夢野先生がくれるアドバイスを三人の大学生と一緒に聞くことで、なんだかその考えはちがうことが分かってきた。

夢野先生は「幸せな仕事人生を歩む」ということを言っていた。また、そのためには自分の能力を最大限生かすことと職場の人間関係が大切だとも言っていた。人間関係が大切だと言うのは、私も既に経験済みで、私自身も色々な場面で、様々なグループの一人としていたが、どんな人が一緒にいるかで自分の身の振り方も変わるし、その後で味わう充実感も変わる。簡単に言えば、活動後に楽しかったとか、そうではなかったとかいうものだ。

では、自分の能力を最大限生かすとは、どういうことなのだろう。会社とか職場というところには、何人もの人が働いている。その一人一人は、一見みんな同じ仕事をしているようだが、よく見れば違う仕事をしている。一番、私の身近なところは小学校だが、そこで働いているのは先生達。先生は私達子どもに勉強を教えるのが仕事で、どの先生も同じ仕事をしているように見える。でも、その学年

が違ったり、学級が違ったりすれば、その仕事の仕方は違うと思う。そう考えると、それはまるでパズルのピースのようだ。ピースが一つ一つ違っても、おたがいがそのすき間を埋め合って、一枚の素敵な絵が出来上がる。そんなふうに関わりあうところは成り立っているんだと私は考えた。

だから、就職活動をするとき、私達はその会社が求めるパズルピースの形がどんななのかを見ればいい。そして、自分の能力というピースの形がおおよそ似ているなら、働く自分も違和感がないだろう。また、その仕事に一生懸命取り組むうち、自分のピースのたりない部分も徐々に補われるのだと思う。そう考えていくと、尾上君のお父さんが毎日おそくまで仕事をがんばる意味が理解できる。

仕事をするということは生きるということ、これは仕事＝お金ということではなく、仕事をする事で多くの人と関わり、その力を発揮することで他から必要とされることだということが見えてきた。そして、仕事人生の扉を開けるための手伝いをしてくれるアイテムを夢野先生が教えてくれた。それは、感謝する事、あいさつする事、相手の話しを聞いて相手が求めていることに答える事の三つだそう。何だか簡単そうだけど。そうか、もう私は仕事という未来へ走り出しているんだね。

(図書名「僕たちはまだ、仕事のことを何も知らない。」)

〈講評〉

働くとはどういうことなのか。本を読む前と読んだ後で、香乃さんの考えが大きく変わったことが分かります。主人公たちと同じ目線の高さで、なぜ人間関係が大切なのか、自分の能力を最大限生かすとはどういうことなのか、一生懸命考えたのですね。それぞれの段落で伝えたいことや前後との関連がはつきりしており、考えの変容が自然に展開されています。この本との出会いで見つけたことを大切に、香乃さんも夢に向かって頑張ってください。

自分だけの水色のバスは

宮古市立田老第一小学校 六年

館崎 百奏

ここではないどこかに行ってしまいたい……そんな思いで心がいっぱいになったとき、どこからともなく走ってきて、まるで「早く乗って」と言わんばかりに開く乗車口。その水色のバスは主人公達を乗せ、千代商店へと運んでくれる。店主の千代ばあちゃんは柔らかな笑顔で彼らを迎え、彼らが幼かったころの話をする。千代ばあちゃんは、時にココアやヨーグルトジュースをこちそうしてくれる。きつとそれは、その子たちが千代商店に通っている頃、好きだったものに違いない。そうして、ひとしきり千代ばあちゃんと話しただけに、どの子も心が前向きになっている。あんなにも消えてなくなりたいって思っていたのに。千代ばあちゃんは悩む彼らに決して解決策なんか話したりはしていない。なのにどうしてそこまで彼らの気持ちを変えることができたんだろうか。

きつと、幼かった頃の純粹な自分を思い出させてくれたからではないかと私は思った。主人公達がそうだったように、私も周りの人に合わせて行動をしたり、逆に自分の思いとは違うことをしてみたりと、その時その時の状況で判断しながら行動をしている。低学年の頃ならもつと自由に自分本位でやっていた。なぜ自分本位で行動できなくなったのか。それは自分が分かってきたこと、周りの人が見えてきたこと、加えて自分が相手にどう映るかということ、これらが自分の視野に入るから。「入ってしまうから」というのが正しい表現になるのかもしれない。視野に入ってしまうのも成長の一つだと思うが、それが消化しきれずに苦しいことがある。そういうときこそ、基本に返れ、そんなメッセージが千代ばあちゃんから聞こ

えてきそうだ。あなたはあなたのままでいいし、相手ばかりを尊重しなくて大丈夫だよ——きつと千代ばあちゃんはそんなことを伝えたかったように思う。

そして悩んでしまったとき一番ほしいのは自分を包み込んでくれるもの。優しくフワフワとしているけど、決して壊れてはしまわないしなやかさをもっているようなものに自分の全部を預けてしまいたい。千代ばあちゃんの笑顔と話し方は、英太にとつても嬉々にとつても包み込まれるような感覚があっただろう。また、千代ばあちゃんのゆっくりとした口調はどんな人の心でもふんわりと取り囲み会話の間があることで過去の自分に立ち返ることができたのかもしれない。そうやって心にできてしまった大きなしわを、千代ばあちゃんという人肌のアイロンでゆっくりゆっくり伸ばされていったんだと私は感じた。

学校が統合して二年。前の学校と違っていろんな人がいて、いろんな事がある。たまに切ない思いでいっぱいになることもある。私の目の前に水色のバスは来ないだろうけど、自分だけの水色のバスと千代商店を、その都度、見つけていきたいな。これからもきつと。

〔図書名〕『さよなら、ぼくらの千代商店』

〈講評〉

つらいことや悲しいことがあったとき、どうやって乗り越えていくのか。人の心をいやしてくれるものは何なのか。千代ばあちゃんの姿から、百奏さんは大切なメッセージを受け取ったのですね。自分の心の内面を見つめるのは難しいことですが、百奏さんは、幼いころの自分と今の自分を正直に表現することができており、この文章が実感あるものとして読む者に伝わってきます。全体的に優しく温かな書き方も魅力の一つとなっています。

小さな体で作る大きな森

軽米町立晴山小学校 二年

古だて ひより

「ダンゴムシって、ワラジムシと同じ虫でしょ？」

わたしの母は、まじめな顔で言った。わたしは、このといかけに答えられなかつた。みんな見たことのあるダンゴムシだが、わたしのように、くわしくしらず、気もちわるい生きものだと思っている人は、多いのではないだろうか。

この本は、ちしきのないわたしに、ダンゴムシの生たい、ダンゴムシたち小さな生きもののやくわりを教えてくださいました。

ダンゴムシは、夜こうせいで、昼間は石のかけなどで休んでいるのだそうだ。わたしは今まで、むりやりおこしていたのだと思うと、とても、もうしわけない気もちになった。くらくらになるとダンゴムシは、ごはんを食べにうごきました。ごはんは、おもにおちばだが、時どき、コンクリートも食べるという。わたしは、あんな小さな虫が、コンクリートをけずるほどのあごをもっていることにおどろいた。おちばは、ほかの虫のごはんでもあって、ワラジムシというダンゴムシの親せきのような虫や、てんてきのアリなどもあつまっているという。ダンゴムシは、アリにおそわれそ

うになった時、丸まってこうげきをしのぐのだそうだ。わたしは、きけんでもごはんを食べに行くダンゴムシのすがたに、いつしようにけんめい生きようという、力づよさを感じた。ダンゴムシが出したふんは、森のひりょうとなり大きな森をそだてる。いつしようにけんめい生きていただけなのかもしれないけれど、ダンゴムシは、小さな体で、大きなしごとをしているのだなと思った。

わたしは、この本を読みおえて、ダンゴムシのイメージがかわった。気もちわるいなど思っていたことをあやまり、わたしたちに食べものや、きれいな水をくれる森をそだててくれてありがとうとつたえたいと思う。

〔図書名「ぼくらはもりのダンゴムシ」〕

〈講評〉

ダンゴムシとワラジムシの違いを知らない人、ダンゴムシを気持ち悪いと思っている人はたくさんいると思います。

でも、ひよりはさんは一冊の本と出会ったことで、ダンゴムシの生態だけでなく、小さな体でありながら、大きな森を育てる役割を担っていることを知りました。

お母さんや友達たちに、ダンゴムシの素晴らしさを伝えていってくださいね。

世界一ありがとう

盛岡市立北厨川小学校 三年

櫻田真尋

ある日の夜に、八の字ひげを生やして、でっぷりとしたしんしが「世界一まずい料理」を注文しました。わたしは、おいしそうな、おいしくなさそうな感じがしました。題名を見た時に、はじめは、おいしくないのかな？と思いましたが、表紙の絵を見て、しんしが、おいしそうな顔をしていたので、おいしいのかな？と思いました。

もし、わたしが、世界一まずい料理を食べてと言われたら、食べません。こげていて、にがくて、おいしくないと思うからです。世界一まずい料理を作ったのまれたら……。家にある、からあげ、レモン、玉ねぎ、人じん、ほうれん草、小まつ菜、青菜、よもぎ、大こんの葉っぱをまぜて、にたから、粉チーズをふりかけて出来上がり!! すきな物ときらいな物をまぜたら、おいしくなくなるから、世界一まずい料理ができると思いました。

らいおんシェフが作る世界一まずい料理はどんな料理かと、どきどきしていました。こげていて、形がぐにやぐにやとしていたので、すぐおどろきました。しんしが、たのんだ世界一まずい料理が、子どものころお母さんが作ってくれた料理だったことを知って、もつとおどろきました。しんしが食べたことのない世界一まずい料理をたのんだはずなのに、じつは、子どものころのお母さんが作ってくれた料理だと思いついていたからです。

しんしの思い出は、少し悲しい思い出と思います。しんしが子どもの時に、お母さんは料理が下手だったから、しんしはいつもまづいまずいと言って悲しませていました。子どものしんしは、お母

さんがしんしをよろこばせようと、一生けんめいどりよくしてくれていたことを分らなかったからです。やさしさや思いやりの気もちが足りなかったからです。しんしは気づいて、お母さんごめんなさい、本当にごめんなさいという気持ちで、世界一まずい料理を食べたと思います。お母さんありがとうと思つたと思います。

世界一まずい料理は、思い出の料理でした。世界一うれしい料理でした。しんしのお母さんは、天国で、うれしい、作ってあげてよかったですわらつてゐるかもしれません。さいしょ、いばつて店に入つて来て、意地悪そうに注文したしんしは、え顔で帰っていきました。お母さんの気持ちが分かつたからです。

わたしがこれから料理を食べる時は、作ってくれた人に感しゃの気持ちを伝えながら食べたいです。今までよりも、もつとたくさん伝えたいです。しんしみたいたいにならないように。

ふしぎていのまほうのれいぞうこのおじさんの顔が、わらうほどおもしろかったです。わすれていた子どもの時のことを思い出させてくれた料理の力はすごい。次は、どんな料理のざい料を用意してくれるのか楽しみです。

〔図書名〕『ふしぎ町のふしぎレストラン 世界一まずい料理』

〈講評〉

題名や表紙の絵は、確かに、まずいのかおいしいのか何だろうと思わせられますね。「世界一まずい料理」を想像したら、真尋さんのような料理になるかもしれません。真尋さんは本を開く前から、想像力をいっぱい働かせているのだなあと感心させられました。

紳士が頼んだ世界一まずい料理は、子どものころの自分にもどつて、「ごめんなさい。ありがとう。」を言いたい料理でした。世界一のありがとうを大切にしていきたいですね。

中洞さんと山地酪農

宮古市立田老第一小学校 六年

田村昇龍

「おれ、牛飼いになる。」

そんな言葉を誰にはばかることなく、幼いころから言い続けてきた中洞さん。今でこそ、山地酪農は環境に適した酪農と言われたり、そこで生産された牛乳やバターが高値にも関わらず売れていたり、全国的にも注目されている。だから、ずいぶん順風満帆できたのだろうと思っていたが、中洞さんはいくつもの壁にぶち当たって今があることが分かった。

一つ目の大きな壁は、山地酪農と近代酪農の差だ。当時は近代酪農がほとんどであり、大量生産、大量消費の世の中には、その方法が都合が良かった。中洞さんは生まれたときから牛と一つ屋根の下で生活し、牛の一生を見つつ暮らしてきた。つまり、中洞さんにとって牛は単に自分たちの生活を便利にしてくれる道具ではなく、一緒に生活する仲間とか家族のような存在なのだろう。これは山地酪農に通じるものがある。一方の近代酪農は、牛を機械のように扱い、使い捨てするような方法だ。五年もたったら乳牛としてはい物にならなくなり、食肉用とされるのだそう。これを知った中洞さんは身を切られるような心の痛みを感じただろう。

二つ目の壁は、お金。牧場をやるにはとてつもなく広い土地と高価な設備が必要になる。それを手に入れるにはお金がなくてはならない。当時、時代が求める方法と中洞さんの方法は真逆だったことから、収入はかなり厳しいものだった。

三つ目の壁は農協との攻防。特に厳しいと僕が感じたのは三・五

パーセント問題。栄養豊富なえさを与えられる近代酪農の牛乳は簡単に乳脂肪分を調整できるが、自然任せの中洞さんの酪農はそこが安定しない。

こんなに厳しい壁を乗り越えられた原動力は、中洞さんの、牛に対する愛情だったことは言うまでもないが、やはり牛乳は人の口に入るものという点を考えた時、人間の都合で手を加えたものを飲んでいたら、いずれ健康にも悪いと考えたからだと思う。牛も人も自然の一部。だったら乳脂肪分が変化するのも自然なこと。自然に生きるものが自然に逆らうのはおかしい、そんなふうに考えたからこそ、どんなに苦しくてもこだわりの酪農をつらぬいたと僕は感じた。

僕の家近所に山地酪農をやっている山がある。車で国道を通ると、山の斜面に牛たちがのんびりと歩きながら草を探したり、座り込んで休んだりするのを見かけることがある。気が遠くなるほどずっと昔、牛たちはこうやって自由気ままに野山を歩き、草を食べ、星をながめながら眠ったのだろう。今、山地酪農の牛たちは本来の姿に戻っていつている。どんなに牛乳の成分が変わろうと、自然にそうなるのなら、かえって僕等の体には良い影響を与えてくれると思う。今後も牛たちの命の一部、牛乳を有り難くいただきたい。

（図書名「しあわせの牛乳」）

〈講評〉

素晴らしい文章構成となっています。特に「中」の部分では、山地酪農を実現するために、主人公の中洞さんが直面した壁について述べ、その壁を乗り越える原動力となったものは何か、考えを深めていくあたりが見事な展開になっています。まとめも、昇龍さんの思いが無理なく素直に表現されています。このお話から考えたことはたくさんあると思いますが、中洞さんの山地酪農に対する思いを一貫して書き進めたことが明確な論旨につながっていると思います。

ダンゴムシさんへ

平泉町立長島小学校 一年

ちば まなみ

ダンゴムシさんは、じょうぶなくちをもっているんですね。小さいけれど、はっぱをバリバリたべてすごいです。じぶんのからをかたくつよくするために、コンクリートもたべるとして、びつくりしました。わたしは、きゆうしよくをたべるのが、にがてでした。でも、すききらいなくたべて、からだをつよくするために、がんばってたべています。わたしとダンゴムシさんは、にていますね。

かれはをたべるとうんちが出て、うんちは森のいきものをそだてるえいようになることをはじめてしました。大きな森がそだつのは、ダンゴムシさんやミミズさんのおかげだったんですね。わたしは、ドングリをさがしに森にいったことがあります。大きなドングリを見つけたばしょには、大きな木があつておちばがたくさんおちていました。ダンゴムシさんやミミズさんが、たくさんかれはをたべてうんちをいっぱいしてくれていたんですね。

学校の校でいで、ダンゴムシさんを見つけると、まるくなるのがおもしろくて、よくみんなであそんでいました。でも、ダンゴムシさんがまるくなるのは、じぶんのみをま

もるためだったんですね。それから、いしの下や木のはっぱの下などのくらいとところにいるのは、よるかつどうするために、ひるまはねむっていたことを、本をよんではじめてしりました。ねむっていたのに、きゆうにおこしてしまったり、まるくなるようについついてしまったりして、ごめんなさい。これからは、びつくりさせないように気をつけます。でも、ダンゴムシさんとなかよしでいたいので、またいっしょにあそんでくださいね。

大きな木や森を見つけたら、ダンゴムシさんのことをおもいだします。たくさんたべてたくさんうんちをしてね。わたしも大きくなるようにがんばるよ。 まなみより

〔図書名「ぼくらはもりのダンゴムシ」〕

〈講評〉

まなみさんは、ダンゴムシが自分たちの生活を紹介してくれる本を読んで、ダンゴムシに手紙を書きたくなったんですね。初めて知ったことに対する驚きや自分とダンゴムシの共通点についての気づきを、ていねいに綴っているので、ダンゴムシも手紙を読んで喜んでいるのではないでしょうか。

小さなダンゴムシのうんちが、森の生き物を育てる栄養になり、大きな森が育っていくことをみんなにも知ってもらいたいですね。

プラスチックごみをへらそう

盛岡市立上田小学校 四年

土井 尻 旺 介

テレビでプラスチックごみが、たくさん海に流れている光景をみました。本の中で出てきたごみの島と同じでした。本で、そのページを見た時に、ごみの島には、おどろいたけれど、現実にもそんな場所があるとは、もつとおどろきました。

本の主人公と同じように、「ごみをすてる時は、分別さえしつかりすれば大丈夫。ごみは、かたづければ良い。」とほくも考えていました。でも、この本を読み終えて、その考えは、改めなければならぬとほくは、気づきました。ごみは、へらさなければならぬのです。ごみについて、いろいろなことが分かったので、ごみをへらしたいという気持ちが強くなりました。

まず、分かったことは、プラスチックごみは、自然で分解されるのに、とても長い年月がかかるということです。例えば、アルミ缶は、二百年、ペットボトルは、四百五十年、釣糸は、なんと六百年もかかります。プラスチックは、かん単には分解されないのです。いづれでも土の中や、海の中に残り続けるのだそうです。

それから、マイクロプラスチックの問題も大きな被害を生み出していることを知りました。マイクロプラスチックとは、すてられたプラスチックごみが海などをただよううちに、5ミリメートル以下の小さなはんにくだけたものです。これは、海の生物に被害をあたえるだけでなく、ほくたち人間も、気づかないうちに体の中に取り込んでしまう可能性があります。マイクロプラスチックには、有害な化学物質がつきやすいと書いてあったので、こわいと思いまし

た。

また、海の生物へのえいきょうは、特に深こくです。ほくたち人間のせいで、他の生物が被害を受けているという事実には、心がいたまりました。この被害は、できるかぎり早く止めたいと思いました。

南太平洋のヘンダーソン島は、とてもきれいな場所でした。でも今は、世界中から流されてきたプラスチックごみで、ごみだらけの島になっています。ほくたちのちよつとだけなら大丈夫、という気持ちが集まった現れのように思いました。

でも、ほくたちの周りには、たくさんプラスチック製品があります。どのようにへらしていかかが課題です。使いすての製品を使用しないお店もあるようです。そのようなお店が、もつとふえれば良いと思います。

今、ほくは、むだにプラスチック製品を使わないように努力しています。テイクアウトの食べ物に、プラスチックのフォークが付いてきます。これを使わずに、家のフォークを出して食べます。今度、お店で断れる時は、もらわないようにしたいです。これから、海の自然を守るため、ほくたち自身の健康や命を守るために、考え、行動していきたいです。

（図書名）『ゴミの島のサバイバル』

〈講評〉

わたしたちの住む地球が汚れたり、生き物の命がおびやかされたりすることは、あつてほしくないことです。でも、自分のこととして考えることはとても難しいこと。旺介さんは、「ゴミの島」のことをこの本でくわしく知り、人間の気持ちや行動がごみをふやす原因になっていると気づいたり、プラスチックごみをへらすためにできることについて考えたりしています。できることを行動し始めた旺介さんを、みんなで見習っていきましょう。

牛乳に感謝して

盛岡市立土淵小学校 五年

吉田 航

ぼくがこの本を選んだ理由は、いつも牛乳を飲んでいられるけれど、幸せの牛乳とはどんな牛乳なのか知りたかったからだ。この本は、自分の夢をすぐにあきらめないこと、自分も他の人も幸せに過ごせることが一番だということを考えていると思う。

ぼくにとって中洞さんは、夢の人だ。近代酪農は、牛の痛みを考えずにますますせず鼻輪を付けたら、牛舎内では角がじゃまになるからと切りおとしたりする。もしも、ぼくが近代酪農の牛だったら、人生で一度も空を見られないのは一番の不幸だ。栄養豊富なえさで太らされ、沢山の牛乳をつくるために牛の健康は犠牲にされる。牛乳をつくるために機械のようにあつかわれ、乳がしぼれなくなれば肉牛として売られる。ここでは、目が見えなかったり立てなかつたり、すぐに体をこわしてしまふ。おかしな牛が沢山生まれることを、ぼくは知らなかつた。中洞さんは沢山勉強して、近代酪農を知り、山地酪農と出会い、人間にとつても牛にとつても負担の少ない酪農を目指した。自然なままに牛を飼い、安全で安心な牛乳をつくるうとしたのだ。

中洞さんの酪農では、外国から輸入された穀物を与えない。人間が食べられない植物でも、牛の体を通して人間も食べることでできる乳製品をつくる。人間の都合だけで自然を利用するのではなく、自然と共に生きることが、牛にとつても人間にとつても幸せだと考えている。それは、地球にとつても幸せなことなのかも知れない。どんなに牛のことを考えていても、牛乳の乳脂肪分の量によつて

農協の買い取り価格が半減するそう。それでも、中洞さんは山地酪農をあきらめなかつた。はみ出し者だとうわさされ悪口を言われても、簡単にくじけなかつた。ぼくならどんなに成功させたい夢でも、沢山悪口を言われ苦しい生活が続いたら、周りの酪農家と一緒に辞めてしまふと思う。中洞さんは、自分の牛乳をブランド化するため動いた。農協に売るのではなく、自ら製品化するという決断は、とても勇気が要ることだろう。実際に、中洞さんの牛乳を殺菌してくる業者はなかなか見つからなかつた。それでも、中洞さんはあきらめなかつた。

日本で市販されている牛乳の九割以上は超高温短時間殺菌、中洞牧場牛乳は、しほりたての牛乳に近い味や成分を残せる低温保持殺菌。容器も紙パックのにおいが移らないようにガラスびんを使っている。紙パックなら、回収の手間がなくて楽なのに、中洞さんは手間を惜しまない。ぼくは、まだ中洞牧場牛乳を飲んだことがない。せめて、低温保持殺菌の牛乳を飲んでみようと思つてみた。何軒かの店を探したが、見つけれなかつた。

ぼくは、毎日牛乳を飲む。牛の気持ちや生産者の気持ちを想像しながら、飲むことに感謝して、今日も牛乳を飲んでいられる。

〔図書名〕「しあわせの牛乳」

〈講評〉

自分のめざす酪農を実現するため、主人公の中洞さんがさまざまな工夫と努力で困難を乗り越えていく姿が丁寧に書かれています。航さんが、中洞さんの熱意や夢をあきらめない姿勢に強く心を打たれたことが伝わってきました。自然や他の生き物を大切にすることが、人間の幸せにつながることに気が付きましたね。生産者の思いが詰まった食べ物や飲み物は、きつと幸せの味がすることでしょう。中洞牧場の牛乳を飲んでみたくなりました。

ゆう気を出したタクくん

盛岡市立桜城小学校 一年

すず木 はるの

さいしょからさいごまできんちようしながら、よみました。なぜかという、うちべんけいな二年生のタクくんといぶんがにいたからです。いぶんがしゅじんこうのタクくんになった気ぶんで、さいごまでよみました。とくにころにのこったのは、となりのせきにすわったこわそうなおにいさんに、

「おきてください。」

と、こえをかけるところと、バスのきゆうけいで、サービスエリアのトレイにいったあとといぶんのバスがわからなくなつて、

「ぼくのバスは、どれですかー！」

と、さけんだところと。うちべんけいなのに、ゆう気を出して、大きなこえでさけんだところがすごいとおもいました。わたしだつたらどうだろうとそうぞうしたら、どきどきしてのどに大きなかたまりが、つまつたみたいにくるしくなりました。

すてきだなとおもつたのは、タクくんのおねえちゃんがいぶんの大せつなゆうしゃのメダルをおとうとのタクくん

をあげますためにプレゼントしたことです。わたしははじめおねえちゃんはいじわるな子だとおもつてよんでいました。でも本とうは、やさしいおねえちゃんです。わたしもおねえちゃんにもいもうとがいます。わたしもやさしいおねえちゃんになれるようにがんばりたいです。

山なしのおばあちゃんいるところにおじついたとき、わたしはとて、ほつとしました。タクくんは、バスの中の人たちやサービスエリアでたすけてくれたバスガイドさんやうんでん手さん、きんちやくをくれたおねえちゃんなどたくさんの人にたすけてもらつて山なしのおばあちゃんのところにあんしんしていくことができました。わたしもうちべんけいだけど、タクくんみたいに、まわりの人をしんじていろいろなこと、ちようせんしたいです。ほうけんもしたいです。

（図書名『ほうけんはバスにのつて』）

〈講評〉

はるのさんが、内弁慶の主人公のタクくんになった気持ちで、緊張しながらこの本を読んだ様子が伝わってきました。タクくんが勇氣を出して大きな声を出したところで、自分なら「どきどきして、大きなかたまりが詰まつたみたいに苦しくなる」と書いた表現が素晴らしいです。

また、タク君の旅が、お姉ちゃんをはじめとした、周りの人々の助けに支えられていることに気づいたこともよかつたと思います。

大切なのは思いやり

盛岡市立土淵小学校 三年

菊池 舜人

ぼくが、この本を読んで心にのこったのは、生きものをかうときに大切なのは「思いやり」だということ。生きものは、言葉で話すことはできないから、相手の気持ちを人間がわかってあげないといけないからです。

貴紀は、毎日ラッキーのさん歩をしました。ラッキーが、おいしくなさそうにドックフードを食べていたことに気づいて、毎日手作りごはんも作ってあげました。毎日必ずお世話するのは、とてもむずかしいことです。貴紀は、本当にラッキーのことを大切にしているんだなあと思いました。

ぼくも、レオパゲツユというトカゲの「レン」をかっていました。はじめはなかなか人になれなくて、すぐ箱の中に入れてしまつて、さみしい気がしました。でも、ちよつとずつえさも食べてくれるようになって、レンの「おいしい。」という気持ちも分かってきました。レンがにっこりしたような顔に見えるからです。そして、もつとちよつとだと言つたようにアピールしてくるのです。貴紀も、毎日お世話して、ラッキーの気持ちを感じていたと思います。ラッキーが、つい間板ヘルニアで立つことができなくなった時も、病氣のことを調べて毎日マッサージをしてあげました。びっくりしたのは、ラッキーが立ち上がったことです。じゅう医さんでもなおすことができなかったのに、貴紀が、がんばつてお世話したから、ラッキーもこたえたのだと思います。

ぼくも、レンがうまくだっ皮できなくて、病院につれて行つたことがあります。不安で暗い気持ちだったけれど、先生が薬をぬつて

くれてレンが元気になると、ぼくも元気になりました。

でも、レンは、急に死んでしまいました。ぼくにとつて弟みたいな大切な家族だったから、ずつとなみだが止まりませんでした。好きだったサッカーも楽しく見えなくて、

「レンがいてくれたから、ぼくはサッカーも勉強もがんばることができたんだなあ。」

と、気がつきました。

貴紀は、ラッキーが年をとつて息を引き取つた時、なみだを流して悲しんだけれど、

「ラッキーはもうぼくの中にいるよ。」

と言っていました。ラッキーの気持ちが何でも分かるくらい大切にできたから、いつまでも心の中でいっしょにいられるのだと思います。ぼくも、今でもレンを思い出すと泣きたくなるけれど、この本を読んで、ぼくの心の中にもレンがいると思えるようになりました。「レンは、ずつとぼくの心の中にいるよ。だから、もうさみしくないよ。」

と伝えたいです。そして、

「ぼくのところへ来てくれてありがとう。」

と言いたいです。ぼくも、またもう一度、動物といっしょにくらすことがあつたら、思いやりの心を大切にしたいと思ひます。

（図書名「動物たちのお医者さん／わさびちゃんときまわりの季節」）

〈講評〉

大切にお世話している生きものは、自分の家族そのもの。舜人さんにとつて、トカゲのレンがいなくなったことはとても悲しいことでした。貴紀とラッキーのことが、自分とレンにかさなるようで、レンのことを思い出しながらこの本を読んだのです。舜人さんの心の中には、レンとの思い出がたくさんあります。それは、とてもすてきなことです。舜人さんがいつかまた動物とくらす時、きっと貴紀に負けない思いやりで、大切にできると思ひました。

仲間から学んだ愛

一戸町立奥中山小学校 六年

釜石知奈

私とこの本の主人この星亜梨沙さんは、生きる環境が全くちがいました。星さんは愛を知りませんでした。母親は星さんのことを相手にしないし、小学校の友達も星さんのことをいじめるからです。先生なども星さんを信じてくれないので、星さんも周りの人を信じてくることができません。けれど、星さんは中学生になって自分を信じてくれる人や、同じきょうごうの人に出会いました。そんな中学校で出会った人達と星さんとの関わりから私は、愛とは何かを知ることができました。きっかけは二つあります。

一つ目は、学校祭です。発表で大事な役の大友さんが父親になぐられ、入院することになりました。大友さんはその時、代役を星さんに任せました。形はちがうけれど自分と似ている星さんのことを大友さんは信じてくれたのだと思いました。星さんは、いつも小さい声でほそほそと話し、ちゃんと練習をしませんでした。ですが、本番会場に来た大友さんを見た星さんは、体育館中にひびく声を出し、発表を成功させました。私は、星さんが大友さんのためにがんばろう、という気持ちがあつたから大きな声を出せたのだと思います。星さんのだれかのためにがんばるという気持ちが愛だと思いました。

二つ目は、体験学習です。星さんは体験学習に行った時、小学生のころ星さんをいじめた由奈という女の子に会いました。小学生の時に星さんが包丁を持って向いただけで、由奈が人殺しと言って、星さんが学校に来れなくなるということがありました。由奈は、自

分のやっていきたいじめをたなに上げ、人殺しだと星さんのクラスの人に言いました。するとクラスの人は、「それであなたは、何をしたの？」など、由奈を口々に責めました。クラスの人は星さんのことを信じていると思いました。私はきらいな人を信じてことができませぬ。クラスの友達もきつと愛があつたから信じてことができなと思ひます。なので私は、信じてることが愛だと思ひました。

私は、本の中で心に残つた言葉があります。それは「愛も憎しみも、自分の中にある」という言葉です。私は、苦手な人がたくさんいます。それは、相手が悪いからだと思つていたけれど、私が苦手だと思わなければ苦手な人ではないのだと気付きました。憎む権利も愛する権利もあるのならば、私はたくさんの人を愛したいと思ひました。

私は、星さんに暗い日「暗日」ではなく明るい日「明日」が来れば良いと思ひました。今、私の周りには、星さんのように愛を知らない人はいないと思ひます。けれど、もしもいたら星さんが中学校で出会つた人達のように愛したり、信じてたりしたいです。私は、これから「愛も憎しみも、自分の中にある」という言葉を大切に、たくさんの人を愛せるようになりたいです。

（図書名「それでも人のつもりかな」）

〈講評〉

主人公と仲間の関わりから「愛」とは何か、じっくりと考えを深めていたことが伝わってきました。愛とは、誰かのために頑張ることであり、人を信じてることであるということに気付いていく過程が、きっかけとなった場面と共に書き進められているので、大変分かりやすく、上手な書き方であると感じました。まとめの部分には、心に残つた言葉が効果的に引用されています。人を憎むより愛せるようになりたいと思つた知奈さん。この本との出会いを通して、大きく成長しましたね。

審査を終えて

令和二年度の冬も多くの作品が寄せられました。応募数は、低学年が五十七点、中学年が四十二点、高学年が二十五点、合計百二十四点でした。

私たち審査員は、それぞれの作品を読み味わいながら、読書感想文として内容について協議してまいりました。その中で、話題になったことを次のようにまとめましたので、今後の参考にしていただけたらありがたいです。

【低学年】

子どもらしい発見や驚きが、素直な言葉で書かれていました。本の登場人物に、たくさん話しかけながら読み進め、低学年らしく本に親しんでいました。

原稿用紙二枚の最後の行まで使って書いている作品が多く、あふれる思いが感じられました。

【中学年】

本を読みながら、自分が見聞きしたことや体験したことを思い起こして書いています。体験をうまく結びつけた書き方に、説得力がありました。

感想を表す言葉が工夫され、どの作品もしっかりと感想が書かれていました。

【高学年】

読むことを通して自分の生き方を振り返り、これからの自分に生かそうとする作品に、高学年としての力強さが表れていま

した。

題名の付け方が多様で、一人一人、ていねいに考えられていました。題名からも、本が訴えているメッセージ性を探ろうとする気概を感じました。

【全体のよさと、次に生かしたいこと】

どの学年も、原稿用紙をいっぱい使って、よく書き込んでいました。本を読んだことで、これまでの自分の考えが変わったことや、読んで役に立ったことが書かれ、本に出合ったうれしさが伝わってきました。

さて、感想文を書くときの表記についてです。次の点に気を配ると、より分かりやすい文章になります。参考にしてみてください。

・「！」「？」の連続がみられます。読書感想文は縦書き文章ですので、感嘆符や疑問符を入れる前に、どのような言葉で置き換えられるかと立ち止まってみてください。

・書きたいことの中心をはっきりとさせましょう。気付いたことや分かったことを、「一つ目は」「二つ目は」と並べる書き方もありますが、この並べた中でも、自分が一番大事にしたいことを明らかにすると、主張が伝わります。

この作品集がお手元に届く頃、皆さんは、次の学年や進学に向けての準備をしていることと思います。皆さんの思考を鍛え思索を深める読書を、ぜひ続けていってください。これからの皆さんのご活躍を期待しております。

審査員 近藤 澄江

たくさんのおうぼ
のご応募、ありがとう。
次も、お友だちをさそってトライしてね。



次回予告

令和3年度夏休み良書推薦運動 第75回読書感想文コンクール募集要項

- 1 主催 岩手県良書推進協議会
- 2 協賛 岩手県学校生活協同組合
- 3 後援 ・岩手県小学校長会 ・岩手県学校図書館協議会
・(一社)岩手県PTA連合会
- 4 課題図書 2021年「夏休み良書推薦運動」
学年・学団対象24冊・学年共通6冊 計30冊 (5月下旬案内開始予定)
※上記以外の図書、学団(低・中・高)ちがいの場合は、審査の対象となりません。
- 5 用紙・字数 ・1・2年生は400字詰め原稿用紙2枚以内
・3～6年生は400字詰め原稿用紙3枚以内
・1行目に題名、2行目に学校名・学年・氏名、3行目から本文
鉛筆は、B以上の濃さのもので書く。
・課題図書名は1枚目の枠外に縦書きで明記
- 6 応募作品 一人1点 (県下小学校児童)
応募作品は、オリジナルで自筆、未発表の物に限ります。
(他のコンクールとの二重応募は認めません)
・応募作品は、理由を問わず返却しません。(必要な場合はコピーをお取り下さい)
・応募作品の著作権、版権は主催者に帰属します。ただし、本人および在籍学校内での利用は妨げません。
・応募要項・課題図書名・前回までの上位入賞作品は学校生協ホームページで確認できます。
・応募された方の氏名・学校名・学年・感想文の題名・対象図書名および作品、表彰式の様子は、主催者および岩手県学校生活協同組合のホームページ、刊行物、取材報道等で公表することがあります。
- 7 応募締切 2021年9月3日(金)当日消印有効
- 8 応募先 〒020-0691 岩手県滝沢市土沢220-5
岩手県学校生活協同組合 企画課 学用品内
「読書感想文コンクール係」
TEL 019(687)2246 FAX 019(687)2240
- 9 賞 最優秀賞・岩手県小学校長会長賞・岩手県学校図書館協議会長賞・
岩手県PTA連合会長賞・優秀賞・入選・佳作・努力賞・
学校賞・学級賞